水害を防ぐため、村を囲む堤防がつくられた！

中大川土居跡（正尺）

この長く続く堤は、江戸時代に自分たちの村を守るために、村人たちが築いた堤（土居）のあとです。近年、農業機械を耕地に入れる際の障害になったため、その多くが取り壊されました。今は、その一部が「中大川土居跡」と呼ばれ残っています。

1788（天明8）年の下興野新田絵図
黒線で村を囲む堤が示されています。
（市指定文化財）

■村人みんなで築いて、村を守る！

江戸時代、葛塚地区の他門・本町・大口・正尺・樋ノ内などは、下興野新田という1つの村で、常に水害に襲われる地域でした。そのため、家や耕地を水害から守るために、庄屋の指揮のもと、村人総出で下興野新田の全体を囲い込む堤が造られました。リーダーとなった庄屋は、遠藤七郎左衛門宗寿といわれています。

堤は、他の村との境界の内側に連続して築かれました。水害のときは下興野新田を救いましたが、その分、近隣の村々へ水が押しやられたため、村々からは強い抗議や非難がありました。しかし、この堤は下興野新田地内に築かれていたため、その抗議や非難をまったく受け付けなかったといわれています。

その後も人々は力を合わせて補強に努め、1857（安政4）年の加治川決壊による水害もこの堤があったために防ぐことができたと伝えられています。

■水田を開発するときも堤を築く

福島潟周辺の低湿地帯では、堤を築いて水田を造成する方法も行われていました。開発予定地に囲い堤を築き、堤の外側からの水を防ぎながら、内側の水を抜いたり、土入れをしたりして水田を造りました。新鼻甲の耕地（古囲・新囲など）はこの方法で造られました。

『北区お宝ものがたり』は、博物館などで1冊800円で頒布しています。